

機関番号：38002

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2008～2010

課題番号：20720050

研究課題名(和文) 琉球諸島における「弥勒神」の図像学的研究

研究課題名(英文) Iconographic Study of "God Maitreya" in the Ryukyu Islands

研究代表者

須藤 義人 (SUDOH YOSHIHITO)

沖縄大学・人文学部・講師

研究者番号：00369208

研究成果の概要(和文)：

弥勒芸能を図像学の視点から体系化するために、来訪神信仰に関する資料収集と調査を行った。弥勒芸能は「マレビト芸能」の一種であると位置づけ、他の来訪神(マレビト)を表象する仮面芸能との比較研究を進め、『マレビト芸能の発生』(芙蓉書房出版)という研究書にまとめた。

研究成果の概要(英文)：

In order to codify "Performing art of Maitreya" from the perspective of iconography, I conducted a survey, and collected data on "Religion of Visiting God". "Performing art of Maitreya" is a kind of "Performing art of Marebito". I proceeded to a comparative study of Performing art and Masks of Visiting Gods. The results were published as "The Birth of Performing art of Marebito" (Fuyo Shobo Publishing).

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	900,000	270,000	1,170,000
2009年度	500,000	150,000	650,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	1,900,000	570,000	2,470,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：芸術学・芸術史・芸術一般

キーワード：弥勒神・来訪神儀礼・仮面芸能・マレビト芸能・豊年祭

1. 研究開始当初の背景

琉球弧の神、仮面・仮装神をモチーフとした〈民俗芸能〉と琉球神話の関わりについて研究することは、古代文芸から基層を掘り出すとともに、民俗祭祀の空間構造、芸能原理を探ることに他ならない。とりわけ沖縄諸島の中でも、八重山地域に根付いた民俗芸能には「琉球弧の古層」が息衝いている。〈民俗芸能〉という学術用語を生み出したことで知られる本田安次も「我々が八重山歌舞に接した最初は、昭和三年四月、…(中略)…その折の強烈な印象は今も忘れることができ

ない。」「……曾れあれほど東京の人たちのゆすぶった八重山歌舞」などと絶賛している。

実際、1959年には滝口宏(早稲田大学)を団長とする八重山学術調査団が結成され、本田は芸能・信仰分野の研究班を担当してフィールドワークを行っている。その成果は『南島探訪記』(1962年)において収められ、後学の基礎文献となっている。

何れにせよ、本研究では多様かつ混沌なる「琉球弧の基層文化」にフィールドを設定し、その基層文化の表象としての〈マレビト芸能〉に焦点をあてた。その理由は、まず琉球

弧（沖縄諸島）が地理的に、更には文化的にアジアの「吹き溜まり」という位置づけにあるとされるからである。比嘉政夫が綿密なフィールドワークに基づいて指摘しているように、大和の基層文化の一部は琉球弧を起源とするものがあり、琉球弧の基層文化に目を向けることは大和文化における伊勢・熊野神話圏を照射することにもなる。

マレビトである「弥勒神」に関しては、出典があいまいな字誌（村落誌）や、用語定義や芸態の分類方法が濫立している研究資料が多い。民俗芸能論的な視点や、既存の関連資料を吟味してゆき、図像学的に分析・分類する基礎研究を行う必要があった。

2. 研究の目的

八重山諸島の仮面・仮装芸能を見て、折口が着想した「マレビト」に、日本民俗学の黎明期をつくり上げたリアリティを感じた。「マレビト」をイメージした仮面・仮装芸能や、その芸態、図像などを調査し、日本人の心象における来訪神の原型を探求することが必要であろう。

仮面神「ダートゥダ」を調査していくうちに、この仮面芸能が「フェーヌシマ」と呼ばれる棒踊り系芸能に分類されることを知った。その後、琉球弧（琉球諸島）の棒踊りを研究対象として調査していき、記紀神話と所縁のある〈九州地方の修験道〉と絡んだ呪術芸能、そして熊野権現の神話伝承へと結びついている要素がある…という仮説に行きついたのであった。その導きは、小浜島の芸能史研究家・黒島清耕氏のささやかな研究成果との邂逅のお陰でもあった。さらには、小浜島の結願祭に通ううちに、「ダートゥダ」と拮抗して登場する来訪神「ミルク」の存在が重要であることが分かってきた。小浜島の二神「ダートゥダ」と「ミルク」は、〈導きの神〉〈山の神〉〈海の神〉という多面的性格を持つ「マレビト」でもある。

「フェーヌシマ」（南島踊り）や「ミルク芸能」（弥勒踊り）を軸として、琉球弧に受け継がれる「マレビト芸能」を、神話学的な視座から体系化を行っていくことを重んじていった。

まず、各地の〈弥勒神〉の芸態を比較するために、すでに研究代表者が収集したデジタル映像による記録保存を始めた。収集した映像記録から、踊り・道巡りの構成、身体動作の技法、踊り手の仮面・仮装について分析する方法を検討した。

それらの結果から、図像学的な視点からの分類を試み、弥勒芸能に顕現する〈弥勒神イメージ〉を体系化することを目的とした。

3. 研究の方法

琉球弧にある仮面・仮装芸能を調べ、
「フェーヌシマ」や「ミルク」を訪ね歩いた。それは、「マレビト芸能」の元々の姿を見出すためであった。折口信夫が、自身で体感した神々を「マレビト」に求めたことと同義であると思う。来訪神にまつわる芸能を「マレビト芸能」と名付け、その成り立ちを聞いてまわり、図像と芸態から、その原型を探り当てる作業を進めたのである。その目標は、日本人の神々に対する〈心象スケッチ〉を再発見することにあつた。

八重山諸島と沖縄本島では、「ミルク」の祭祀行列を追い、「ミルク芸能」（弥勒踊り）を調査対象として検証していった。ミルク神の顕れる祭祀を実際に見て、象徴性やイメージを連想し、学術的な視野を重ねていった。

その作業は淡々と、仮面や仮装、地謡の曲などを映像で記録していく…というものであった。その集積物の分析を進めていくと、目の前には〈海上の道〉が広がっていた。黒潮の流れに沿って、海上信仰や来訪神信仰が点在していた。「ミルク」の仮面や仮装・仏像は、沖縄本島・中国江南・ベトナムまで広まっており、折口のいう「マレビト」の表象イメージと繋がっているような気がした。さらには、「ニライカナイ」というコスモロジー（他界観）を島人と共感することで、〈福の神〉〈豊穡の神〉という多面的性格を持つ「ミルク神」の豊かさを垣間見た。神の似姿とは、信仰する人びとの「心象スケッチ」に他ならない。

このように、東シナ海の周縁に広がる「来訪神・異人伝説」のイメージについて考察することで、「フェーヌシマ」と「ミルク芸能」が伝播した「海上の道」を辿り、琉球弧の「マレビト」の起源を浮き彫りにできる可能性が拓けまいか…と思案することになった。

各地の「弥勒神」の伝承誌を作成するために、過去に映像記録した「仮面」「衣装」「芸態」を分析して比較する作業を行った。

また、弥勒芸能を図像学の視点から体系化するために、先行研究を参考にして弥勒神の分布図・リストを再構成し、本島26、八重山21の計47芸能について書類調査をした。

4. 研究成果

柳田國男の「海上の道」というコンセプトは、一九二〇年から二一年にかけて、九州の東海岸から奄美諸島・沖縄本島・宮古諸島・八重山諸島を旅行した時の紀行文と論考を、『海上の道』や『海南小記』の中で固定化していった概念である。「弥勒節」も日本文化の北上説を補論する要素として捉えられている。房総・相模・伊豆の海岸地帯でも、稲の稔りを運ぶ「ミロク歌」や「鹿島踊り」が

伝承されていることを踏まえれば、日本本土の弥勒信仰との相互関係も考察しなければなるまい。なぜなら、八重山から遙か二〇〇〇キロメートル離れた本州にも、ミルクに纏わる歌謡として「ミロク歌」が残っているからである。それは茨城県の鹿島地方においてであるが、ここでの「ミロク歌」や「ミロク踊り」では、〈弥勒の船〉が鹿島灘に到来する…と歌われている。この「ミロク歌」は他にも本州太平洋岸に点在している。柳田は、「海上の道」の根拠の一つとして記述しており、八重山から稲作が北上し、黒潮の流れに乗って伝わった証拠とも考えた。この仮説は、黒潮に育まれた人々の〈南方の島々〉への憧憬でもあり、「原日本人」の〈常民〉としての他界観を言語化したものであるとは言えまいか。まさに「海上の道」の概念は、八重山に伝わる「南波照間島（パイパティローマ）」伝説の影響を受け、そのコスモロジーを導入して成立したのである。

時代的な前後関係や日本本土における弥勒信仰との関係から考察すると、「ミロク踊り」が直に八重山諸島から伝わったことについては疑問視されている。しかし、黒潮の流れと「ミロク歌」の伝播には何らかの関係があることは否定できない。この解明には、ミルクという仮面神に籠められた二つの海上信仰が、キーワードとして重要となってくる。それは「弥勒信仰」と「補陀洛信仰」である。

来訪神信仰と他界信仰が融合した「ミルク信仰」は、日本本土の「弥勒信仰」や熊野の「補陀洛信仰」から、大きな影響を受けているのは間違いない。

以上のように「ミルク神」というマレビトのルーツが諸説乱立しているのだが、これは一体どういうことなのであろうか。台湾やベトナムにおいては現在もミルク仮面が出現するのを鑑みるに、八重山一帯に分布するミルク仮面群は、琉球弧から〈海洋アジア〉へと繋がっていく〈黒潮文化〉の一つの表象であったとは言えまいか。

八重山諸島においてミルク神は女性として扱われ、子孫を引き連れ行列してくるモチーフがミルク芸能で再現される。しかし、ミルク神の扮装は中国南東部の弥勒菩薩と似ており、禅僧をモデルとしている可能性が高い。確かに、弥勒菩薩信仰は、歴史上の人物である布袋和尚が崇められるようになったという経緯を辿っており、その元型は男性の聖者が神格化されたもの…という見方が優勢である。

ところが、本田安次が著した『沖縄の祭と芸能』の記述にもあるように、鳩間島の豊年祭では、過去においては仮面が着用されておらず、青い着物をまとい、クバの葉を頭から被ったミルク神が出現していたという調査報告もある。これは、ミルクの存在が、仮面

が伝播される以前において、「アカマタ・クロマタ」のような草荘神であったことを意味する。ミルク神の神格を定義する上で、男神か、女神かは明確に区別できないが、プリミティブな意味で、両性的な自然神であると言えよう。

これらを踏まえれば、琉球弧のミルク神は、外見上は中国南東部の弥勒菩薩であるが、観念的には日本本土の弥勒信仰と深く結びついている…という重層的な存在であることが分かる。そして元々のかたちは、両性的な豊穰神であり、アニミズム（自然崇拜）に基づいた草荘神であった。「ミルク芸能」に関しては、仮面や扮装に限って考察すれば、中国南部や東南アジアの系統に属するという見方ができる。そして、海上信仰と来訪神信仰が混交した「ミルク信仰」は、日本本土の影響を受けて成立したと考えられる。つまり、中国伝播説と日本本土伝播説が折衷された視点から、アニミズムの要素をまとった「ミルク信仰」として捉えるのが妥当ではなかろうか。

沖縄本島では、ミルク神は那覇市首里に伝えられているが、とりわけ旧赤田村のミルク祭祀は有名である。そのミルク祭祀は「弥勒御迎え」（ミルクウンケー）と呼ばれ、旧暦七月十六日に出現し、集落内を練り歩く。「御迎え」（ウンケー）と言われているように、来訪神（マレビト）として島人に迎え入れられている。かつてミルク仮面は、赤田にあった「首里殿内（スドゥンチ）」（女性神官の屋敷）に祀られていた。旧盆の後に、ミルクを先頭にした行列が集落内を練り歩き、豊穰、健康、繁栄を祈願したという。その時に「赤田首里殿内」（アカタスドゥンチ）という節が歌われる。この歌は現在わらべ歌として親しまれているが、その旋律は途中まで「ミルク節」と全く同じである。ミルク神の形すがたについては既に述べたように、赤田の神も着物をはだけて太鼓腹を見せ、福々しい表情の仮面を着けている。

琉球弧で見られるミルク仮面は、七福神の布袋の姿をしており、日本本土（ヤマト）でみられる弥勒仏とは全くかけ離れた容姿をしている。これに関しては、琉球弧のミルク神の風貌が、日本本土経由ではなく、布袋和尚を弥勒菩薩の化生と考える中国南部の弥勒信仰に強い影響を受けた…という見方ができるであろう。歴史的には、布袋和尚は中国に実在した人物と考えられ、唐末期、宋、元、元末期の四人の僧が「布袋」として崇められている。その姿は、大きな腹をし、大きな布袋をかついで杖をつき、各地を放浪したと言い伝えられている。このような弥勒信仰は、中国南部から、インドシナ半島にある安南にも広まった。さらには琉球弧にも伝播し、もともと伝来していた仏教観やニライカナ

イ信仰と結びついて、「ミルク神は豊穡をもたらす来訪神（マレビト）」と信じられるようになったという見解もある。

〈弥勒世〉（ミルクユー）とは「過去にあった理想的な豊穡の世の中」という意味であり、島人たちが「神遊び」をする祭祀の中で、その様子を再現したのが「ミルク踊り」であると考えられる。これを踏まえれば、「ミルク踊り」とは、理想的な時空を再現するという祭礼の本質を表したものである…と言えよう。弥勒菩薩の元来の役割は、釈迦入滅後 56 億 7000 万年後にこの世に現れ、竜華三会の説法によって釈迦の救いから漏れた人を救う…という未来志向の来訪神信仰である。ミルク信仰は、仏教的要素を取り込むかたちで習合し、成熟していったのである。

琉球弧には多くのマレビト芸能があるが、豊饒をもたらすミルク神を演じた「ミルク芸能」のように、「フェーヌシマ」も来訪神や異人のなす業として崇めていたのかもしれない。結願祭や豊年祭などの季節の変わり目に、異様な姿に扮した踊り手たちは「ミルク芸能」や「フェーヌシマ」を奉納し、神々をもてなすために踊っていた…とは言えないであろうか。

弥勒芸能を図像学の視点から体系化するために、来訪神信仰に関する資料収集と調査を行ってきた。弥勒芸能は「マレビト芸能」の一種であり、他の来訪神（マレビト）を表象する仮面芸能との比較研究を進め、その成果を『マレビト芸能の発生』（芙蓉書房出版）という研究書にまとめた。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔図書〕（計 1 件）

①須藤義人 著『マレビト芸能の発生—熊野と琉球を結ぶ神々』（芙蓉書房出版、2011 年）
ISBN978-4-8295-0509-0

6. 研究組織

(1) 研究代表者

須藤 義人 (SUDOH YOSHIHITO)

沖縄大学・人文学部・講師

研究者番号：00369208